34）紐育州シャンデーケン在，旧野口英世博士別荘と東京歯科大学（その1）建築当時のいきさつ

The Villa of the Late Dr. Hideyo Noguchi in Shandaken, New York State and the Tokyo Dental College (Part 1) Dr. Hideyo Noguchi's Construction and Utility

東京歯科大学　○森山徳長，柳澤孝彰，高江洲義矩
石川達也，吉峯規雄，堂　信一
在ボストン，U. S. A　堀内　實

Norinaga Moriyama, Takaaki Yanagisawa, Yoshinori Takayesu, Tatsuya Ishikawa,
Norio Yoshimine and Shinichi Do, *Tokyo Dental College*
Minoru Horiuchi, *Boston, U. S. A*

野口英世には，その生涯に3人の恩人が居た．すなわち小林栄，渡部鼎，血脇守之助である．この3名により尋常高等小学校に進んで基礎教育を確立し，手ん棒の手術を受けて自ら医学への志を確立し，医師免許を受けるためとその後の無謀とも言える渡米決行のそれぞれに，野口は成功のチャンスを握り，その燦々たる成功のいしづえとした．

ペンシルバニア大学病理学教室フレキシナー教授の下での蛇毒の研究，留学先デンマーク国立血清研究所マドセン博士の指導を経て，ロックフェラー医学研究所の正所員として時代の先端を行く研究業績を次々とあげた成果は衆知の事柄である．

「蛇毒の研究」「黴毒の血清診断法1—3版」などの主著の他，終生の研究テーマであった黄熱の研究に着々と成果を挙げた研究一途の生活の裏面で，結婚とニューヨーク州アルスター郡シャンデーケン村での夏向きの別荘の建築は，野口の人間性の別の面を垣間見せてくれる．

この事も，実は腸チフスや虫垂炎の療養のため星一に送金を受けた残余で土地を購入，自ら設計して夫人共々幸福な滞在を楽しんだ次第が秘められていた．

1918（大正7）年2月12日付で野口から小林先生夫妻と城母に送った書簡（野口記念会編野口英世書簡集所載）に以下の記述がある．

「(前略)…実は昨年八月中旬にシャンデーケンと申す山中の旅館より保養中の様子を申し上げし以来厄年の厄が未だ盡きざりしと見え三週間の後に再び発熱し九月上旬には辛ふじて紐育に運ばれ(汽車に乗り平臥し妻女が看病して)遂に腸チフスの再発と診断せられ，ロッケフェラー研究所の病院にてまたまた病床に就き前後六週間の後無事に退院せしは丁度十月の二十九日に有之申候，今度は前回の様な危険は無之通過致し候へし，それから十一月十二日にはメーリーが盲腸炎にかゝり…(中略)幸に三週にて退院仕りヤレと一息する間もなくまたまた十二月十四日には小子が盲腸炎を病み遂に十二月十九日にマウント，サイナイ病院に於て手術せられ三週間床上の人となり遂に無事正月四日に退院帰宅せし次第にて中々面倒臭ひ目にあひ申候…（中略）

偖而毎年夏期には大抵は紐育に研究の爲め留まるか，或は海濱の研究所などに出張するか例に有之候も，今年よりは成る丈け健康を守る爲め山中にでも夏期静養に行く様に致し度き考にて，昨年八月中に遊びに行きし附近に二町歩程の土地を買ひ入れ受負人に頼むて夏向きの家屋を建築する手続きを致し候，約束は本年六月十五日までに竣功する筈に候」

研究に追われていた野口英世が腸チフスの再発，盲腸炎にかかり，体調を崩し，今後はなるだけ健康を守るために，避暑地として好んで訪れていたシャンデーケンに夏の間は静養に行きたい旨記述されており，別荘建築の経緯が読み取れる．別荘の間取りや周辺の様子など続いて次のように記述されている．以下の手紙の内容を現代語風に要約すると，

「別荘の間取りは平屋造りで，応接間（10×12尺），客間兼食堂（15×24尺），書斎（12×15尺），台所（12×14尺），浴室兼便所（8×10尺）及び寝

室二間（15×12尺）で，周囲三面は9尺巾の廊下があって夏向きに都合良く出来ている．燈火は電気発動機を据えて電燈をとぼし，堀抜井から電気仕掛けで浴室，台所等に噴出させる訳です．これはシャンデーケン村には数少ない最高の別荘であります．人口百名足らずの閑静な所で，海上二千四百尺以上で蚊は居りません．裏手にはエソプス川があって浅いが清流で遊泳に適し釣も出来ます．近効一帯は山が連なり数哩先には湖水もあり風景絶佳，紐育から汽車で4時間の都合の良い場処で，二町歩もありますので花園や果樹を植付けて楽しみ，一部は野生の大木や草花を保存しておく心算で，今夏には写真を撮りお目に懸けるのを楽しみにしております．」となっている．

以上が野口本人による故国の恩師や母への手紙の内容である．

多忙だった野口英世が，別荘をどの程度使ったかという点については，「野口英世書簡集」で確認できるのは，1918年，1922年，1925～27年の夏であるが，出張等がない期間は，おおむねシャンデーケンを訪れていたと思われる．どういった人達が訪れたかについては，1925年9月8日付小林栄宛の書簡で「今夏妻の兄弟3人避暑に来り2～3週間滞在致し候，其際撮影せしもの数枚御笑覧に供し候」とありメリー夫人の兄弟3人が訪れたことが記されている．その他写真等から堀市郎はじめ友人，日本人留学生たちが訪れたと思われる．

以上をスライドを供覧し報告したい．